

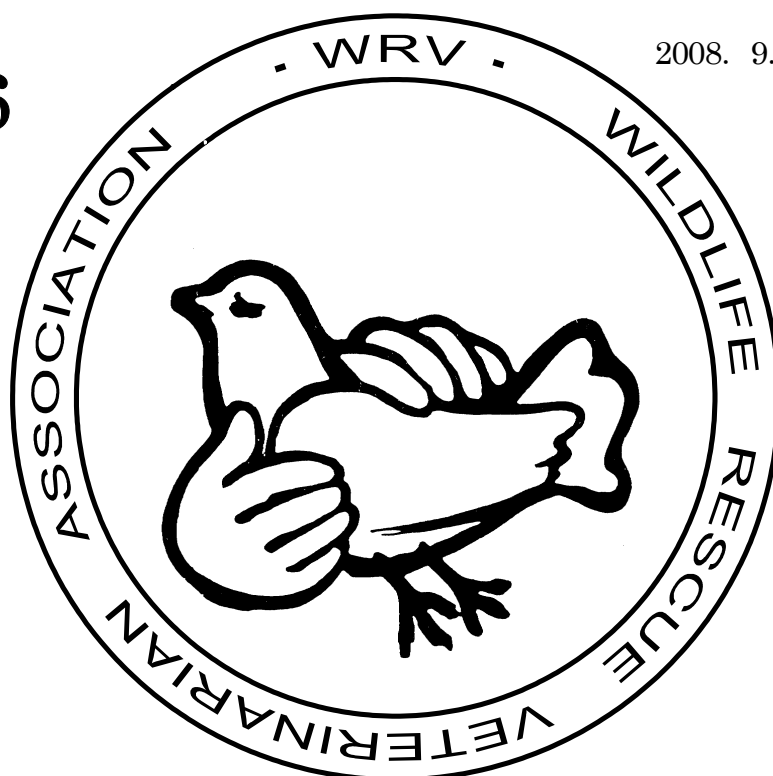
WRV NEWS LETTER

WILDLIFE RESCUE VETERINARIAN ASSOCIATION

特定非営利活動法人 野生動物救護獣医師協会

No.66

2008. 9. 26 発行



野生動物救護獣医師協会は、保護された傷病野生鳥獣の救護活動を通じて市民の野生鳥獣保護思想の高揚をはかるとともに、地球環境保護思想の定着化を目指しています。そのために、常に世界の情勢を学び、会員相互の連絡、交流を行い、治療、研究および知識の普及をはかり、社会に貢献していくことを目的としています。

No.66 目次

福生環境フェスティバル出展報告	2-3
日本小動物臨床学会ブース出展報告	3-5
日本獣医生命科学大学水鳥救護実習	6
アフリカ旅行記	7-8
野生動物看護学の紹介	8-9
第2回油汚染水鳥救護専門家会議	9
鳥インフルエンザについて	10-11
事務局より寄付のお願い	12
事務局より寄付のお礼	12
事務局日誌	12

インフルエンザ対策における地元の行政との連携

WRV 理事 石橋徹

本業の対象動物のみならず 広く野生生物にまで手をさしのべていらっしゃる WRV 会員の諸先生方のお心には、『開業医は、インフルエンザ感受性動物と接触する最前線である』という思いが多少なりともあるのではないかと思います。実際、インフルエンザ問題が深刻化するのを受け、ご自身の病院や周辺の社会のためを考えて、WRV を退会され、野生鳥獣の診療を中止された先生もいらっしゃいます。問題をきちんと直視された方ならではの素早い判断であると思います。

環境省の調査では、主として健常な個体を捕獲してウイルスの有無をチェックしていますが、私たちは『何らかの理由で衰弱した個体』を人間社会のど真ん中で取り扱っています。春秋の渡りの時期には、衰弱したガン・カモ類との接触機会が増加します。言い換えれば我々開業獣医師は、動物由来のインフルエンザウイルスを人間社会の入り口まで迎え入れる機会を増やしている危険性があります。

しかし、今回、様々な関係機関に取材をしてみて強く感じたことは、街の臨床獣医師とインフルエンザ問題の関係はあまり重要視されていなかった。ということです。街の開業獣医師は、医療従事者でなく、社会機能維持者ですらないので、新型インフルエンザワクチンの接種対象ではありませんし、我々が診療所で瞬時にインフルエンザを診断できるような検査キットを準備して配布するということも想定されていません。防護用の消耗品を配布することも、動物病院の個人情報を保護し、発生時に風評被害がおきないように配慮するといった認識も存在しませんでした。

現状を調べれば調べるほど、野生動物救護獣医師は、インフルエンザ問題の蚊帳の外という印象が強く、不運にも直接接触してしまった場合でも『社会から守られていない』と感じました。

しかし、東京都のシステムは画期的でした。環境省が地方自治体へのガイドラインを発表する以前に、東京都は高病原性鳥インフルエンザの対応システムを構築しており、そのシステムは我々開業獣医師にとって大変都合の良いものでした。取材開始時には存在していなかったこのシステムの完成をうけ、今回の調査と対策マニュアル作成を途中でやめてしまおうかと思ったほどです（都の対応マニュアルがなかったのでなんとかしようと思いたったのがことの始まりでした）。

以下にその概要を解説しますので、他府県の獣医師会の先生方が、インフルエンザ問題において自治体と打ち合わせをされる際の参考にしていただければと思います。（尚、環境省には、ガイドラインの中に、自治体の窓口は一般開業医との連携をとること。という一文を追記していただけるようお願いしてあります。東京都の例を参考にしてということになります）

我々一般開業医が接触するインフルエンザ感受性動物で特に重要なものは以下のとおりですが、法律の関係で、対応窓口が異なります。東京都はそれぞれについて、以下のよう

動物愛護相談センター TEL：03-3302-3567

インコ・ブンチョウなど一般的飼い鳥
キジ・猛禽などの合法飼育の野鳥
フェレット・ブタなどのペット

産業労働局農林水産部食料安全室 TEL：03-5320-4845

鶏・アヒル・うずら・シチメンチョウなど家畜伝染病予防法で家禽と分類される飼い鳥

環境局自然環境部計画課 TEL：03-5388-3504 23区

多摩環境事務所自然環境課 TEL：042-521-2948 多摩地区

保護されて動物病院に持ち込まれる傷病野鳥全般

最寄の保健所 <http://idsc.nih.go.jp/hcl/13.html>

接触した人間の相談

これらの窓口は、飼主や拾い主が直接問い合わせをしても対応してくれます。

動物病院で、判断に困る場合や(検査方法がないので毎回100%判断に困るわけですが)、飼主が強くインフルエンザへの恐怖を訴えた場合は、我々獣医師は、相談者ごとこれらの窓口へ引き渡してしまうことができます。

すなわち、こちらが『大丈夫です。鳥のインフルエンザはめったなことではヒトには感染しませんから』と解説したときに、相手が『もし、この鳥がインフルエンザに感染していて、私や家族が感染したらどう責任をとってくれるんだ!』と責任問題にまで言及してきた場合でも、我々開業医は、案件をまるごと行政にバトンタッチできる。ということです。現場での確定診断ができない以上、当然といえば当然なのですが、このシステムによって、我々はインフルエンザの諸問題から解放されるのです。

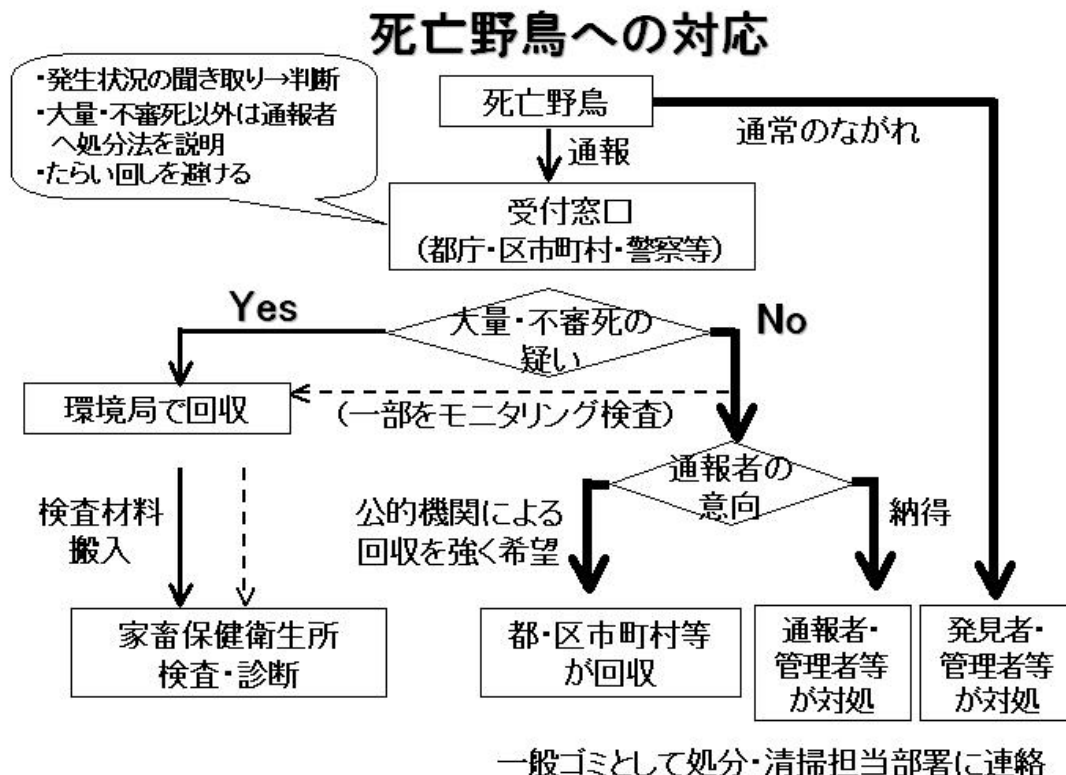
また、野鳥においては、別添のフローチャートが出来上がっており、この流れにしたがって東京都は対応するそうです。

このチャートの中で我々の位置するところは、受付窓口(都庁・区市町村・警察など)に相当します。チャート全体を見渡すと、都としては通報者をなだめおちつかせ、よほどのことがない限り、検査には持ち込まないという雰囲気がみてとれます。

『大丈夫!太鼓判!』という発言は非常に難しく、おいそれとは言えないものなので、これを行政が肩代わりしてくれるのは大変ありがたいことです。

他の都道府県でもこのようなシステムが構築できるよう、獣医師会は担当セクションと協議したらよいと思われます。

あとは野鳥の渡りのシーズンの土日祝祭日に不審な野鳥が押寄せないように祈るばかりです。



日本獣医生命科学大学油汚染鳥救護特別実習開催報告

WRV 理事 大窪武彦

7月30日（水）～31日（木）に開催致しました日本獣医生命科学大学4・5年生対象の「油汚染鳥救護特別実習」の報告をします。

この実習は本来なら4年生対象の実習であるが、今年は、去年参加希望者が多数だったため、去年参加出来なかった5年生を含めて33名の参加者で実施されました。

7月30日（水）は、日獣大校舎において13:00から始まり、初日の講師は、WRV事務局職員であり日獣大非常勤講師でもある箕輪多津男先生と、日獣大教授の梶ヶ谷博先生にお願いしました。

箕輪先生は、「油汚染事故に関する法律と体制」、「鳥類の生態学、種について」、「水鳥のビデオ上映・解説」の3コマを担当していただきました。

「油汚染事故に関する法律と体制」の内容は、油流出事故対策や水鳥救護に係る国際条約及び法律はどういうものがあるのか、平時より油流出事故対策に向けた体制づくりをどのように構築しておくのがいいのか、また、実際の活動に参加するためにはどういった方法があるのか、といったことについての概略をお話されました。午後最初の授業にはお堅い内容で、法律の大事さについてわかっているが、睡魔との葛藤をしている学生が見られました。

「鳥類の生態学、種について」の内容は、油汚染事故が発生するのは海上、または海岸（沿岸）部であり、そこで真っ先に被害に遭う鳥類は水鳥類、特にその中でも海鳥と呼ば

れるグループなので、日本の沿海域で確認されている、アビ目、カイツブリ目、ミズナギドリ目、ペリカン目、そして一部のカモ目、チドリ目の仲間についてお話されました。箕輪先生の得意分野で、私自身個人的に箕輪先生のことを「歩く鳥類図鑑」と称しているぐらい、鳥類についての知識はものすごく豊富な先生です。

「水鳥のビデオ上映・解説」については、上記の海鳥のビデオ解説でした。

梶ヶ谷先生は、「鳥類の病理学」を担当していただきました。油汚染が鳥類に及ぼす影響について、鳥個体への影響を体表の羽毛から消化管、血液系、肝臓、ホルモン、生殖系と詳しく解説し、それらの変化が次世代へ与える影響、また、風化油の次世代への影響についてお話されました。梶ヶ谷先生の講義の後、質疑応答が行われ、17:30 解散しました。

2 日目、7 月 31 日(木)は場所を、日野市の環境省水鳥救護研修センターに移して 13:00 から開始され、この日の講師は、WRV 理事で日獣大非常勤講師の野村治先生、WRV 理事で野生動物ボランティアセンター所長の皆川康雄先生、WRV 会長新妻勲夫先生、WRV 副会長馬場国敏先生、WRV 理事大窪武彦にお願いしました。

野村先生は、「油について」担当していただきました。『油とは何か』から始まり、油の種類、性質、油流出事故後の油の拡散の仕方、その油の回収方法、自然界での油の浄化方法などについて説明され、途中、眠そうな学生が目覚ましに美しい女優さんのサプライズスライドを入り混ぜ、油流出事故には、基礎知識としての油の性質、経時変化、油処理剤、オイルフェンス、回収、清掃、貯蔵、処分、などの知識と油事故は必ず起こるものなので、起きることを想定して、事前に計画を立てて、訓練しておくことが重要である。と締めくくられました。講義の後、羽根を使って実際に C 重油の実習を、各テーブルごとに行いました。

皆川先生は、「油汚染鳥の救護法」について担当していただきました。油汚染鳥の救護の流れから始まり、具体的な救護法、また、先生自身が参加した 2002 年スペイン沖で起こったプレステージ号の時の洗浄ビデオを上映して、この講義後の洗浄実習の説明も行ってくれました。

その後、6~7 人一班で 5 班に分かれてのアイガモ洗浄実習が行われました。新妻、馬場、野村、皆川、大窪の各理事がそれぞれ受け持ち、2 時間の洗浄実習で

した。鳥の持ち方、体重測定、体温測定、聴診、血液検査等の一般身体検査後、強制給餌を行い、もう一度鳥の状態を確認し、二人一組で洗浄を開始。一通り行い、すすぎもしっかりやって、乾燥室に入れて終了。参加学生それぞれ一生懸命汗を流しておりました。

最後に質疑応答を行い、アンケート提出の後に、修了書を授与して解散になりました。

野生動物、特に野鳥に対する理解を深めることが出来た、油汚染鳥の救護について興味が深まった、もっと自主的にボランティアセンターで勉強したい、実際にボランティアとして参加できる機会があったらぜひ参加したい、油汚染鳥のことだけでなく油事故の様々な背景なども知ることができて勉強になった、獣医学科の学生全員が受けるべき内容だった、など様々な感想をいただき、無事終了しました。



実習風景



洗浄風景

「第6回ふっさ環境フェスティバル」参加報告

WRV 事務局 箕輪多津男

去る6月15日（日）に、東京都福生市にある多摩川中央公園にて、「第6回ふっさ環境フェスティバル」が開催されました。

本フェスティバルに、WRV（東京都支部）は3年連続で参加し、本年も昨年同様ブースを構えることができました。

当日は天候にも恵まれ、本イベントの事務局を勤めておられる福生市生活環境部環境課の担当者によりますと、のべで2,500人程の来場者があったとのことでした。ただし、この人数は、ブースのある「げんき広場」だけではなく、熱気球やドッグアジリティの会場、あるいは同時開催されていた「ふれあいバザール」の来場者をすべて含めたものということで、実際に「げんき広場」を訪れてくれた方は500～600人程度ではなかったかという気がいたします。



WRV（東京都支部）のブースでは、先に参加した「東京バードフェスティバル」の時と同様、立ち寄っていただいた方々に「野鳥救護クイズ」を出題いたしました。そのクイズにその場で解答してもらったところでその都度内容の解説を行い、その解説シートに数種のパンフレットと「ヒナを拾わないで!!」ポスター、そして「野鳥救護クイズ参加賞」（ピンク色の紙に印刷したもの）を添え、解答いただいた一人一人の方に差し上げました。ただし、今回はクイズに答えていただいた方が50人足らずということで、用意した資料も若干残ってしまいました。

このほか、ブースの前面には昨年と同様、野鳥救護や油汚染事故対応関連のパネルや写真を張り出し、必要に応じて来場者にその解説をさせていただきました。

交通の便など、いくつかの要因があるかもしれませんが、昨年から今年にかけて、フェスティバルへの来場者（特にブースを展開している広場を訪れてくれる方）がかなり少なくなっているような気がいたします。本イベントを盛り上げていくためには、今後何か一工夫が必要ではないかと思われますので、来年に向け、福生市環境課の担当者とも意見交換を行っていただければと考えている次第です。



会員の方々にも、来年は是非一度、会場に足を運んでいただければ幸いです。

<当日の参加者（ブース運営等）> 野村理事、箕輪（以上 WRV）

日小獣 2008 年次学会（東京）椿山荘

——WRV 展示ブース出展——

WRV 会長 新妻 勲夫

平成 20 年 7 月 19 日（土）～20 日に東京椿山荘において日本小動物獣医師会 2008 年年次学会が開催され、両日合わせて延べ 2,500 人の参加であった。日小獣のはからいで、（特）野生動物救護獣医師協会（WRV）としては、1m×1.8mのブースをこの会にあっては初めて出展することとなった。

東京バードフェスティバル 2008 等の出展で培ったノウハウを生かして、段取りを組み、カワセミ、アオサギ等の剥製の展示に始まり、WRV の活動経験・実習から生み出された著書の販売、特に近年韓国での油流出事故対策で、事故現場での傷病鳥の救護の指導についての報告書。油輸送船ナホトカ号における油流出事故での油汚染傷病鳥の救護についての報告書を始めとする、その後の WRV で油汚染鳥の救護の実体験および、これを機会に行われてきた有事に備えての準備と油汚染鳥の救護、検査、治療の実習書の販売も行った。

中でも、「野鳥を助けるはじめての一步」は、獣医学的知識を盛り込みながら一般の方でも容易に受け入れられる本に仕上がっている。販売した本のなかでも一番の売れ筋であった。

WRV 発展のためにも多くの方が入会して頂けることを願いつつ、入会パンフレットを配布したが、思ったほどの効果は無かったようだ。

野生のヒナを拾って困った。また、タヌキが皮膚炎にかかって蹲っているのを発見したが、どうして良いか分からなかった。ハクビシンが床下にいるようだが、何処に連絡をすればよいか。自分の庭先にキジバトが羽をやられて出血をしていたので、近所の獣医さんに連れて行ったが断られた。等々の野生動物に関しての苦情やら質問を受けることも出来た。

傷病鳥獣救護活動をしている現場の写真パネルおよび解説を展示したところ、興味深げに立ち止まって写真に収めていた人もいた。時折、展示してある剥製に興味深げに観察している人もいた。

日小獣学会での展示ブースの出展は、初めてのことであり、出展準備にご苦労されたことと思います。

お忙しい中を、WRV のブースにお立ち寄り頂きました、本主催者側の日本小動物獣医師会会長松林曉之介先生、（社）日本獣医師会会長山根義久先生、（社）東京都獣医師会会長村中志郎先生、始め、WRV 理事各位に心から深謝申し上げます。

早朝より、WRV ブースに張り付き、お手伝い頂きました WRV 事務局の皆様有り難うございました。

今後は、後援：WRV だけでなく、シンポジウムの講演者または、一般演題の発表者としても参加協力したいと思っています。



「油汚染水鳥救護専門家会議」の報告

WRV理事 皆川 康雄、WRV事務局 箕輪多津男

去る8月23日(土)～24日(日)の2日間にわたり、一昨年に引き続き、WRVの神奈川支部の事務局も置かれている野生動物ボランティアセンター（神奈川県川崎市）を主な会場として、「油汚染水鳥救護専門家会議」が開催されました。今回も、北は北海道から南は宮崎県にいたる各地の専門獣医師を中心に、環境省自然環境局の担当官のお二方を含め、計23名がここに集いました。

うち1日目は、懇親会の形式を取りながら、15名のメンバーの参加によりお互いの現状報告や意見交換を行い、改めて今後の協力関係を確認いたしました。

2日目は各種報告や討論、あるいは実技講習と、充実したプログラムが展開されました。本会議は、開催の責任者である馬場副会長、ならびにWRVの新妻会長の挨拶によって幕を明けました。続いて、この会議のために特別にお越しいただいた、地元神奈川県を拠点に活躍しておられる川口順子参議院議員（元・環境大臣、外務大臣）より、ご挨拶を頂戴いたしました。そして午前中は、4人の代表者による報告、およびそれらについての質疑応答が順次行なわれました。

まず須田理事からは、WRVが、これまで世界あるいは日本国内で発生した様々な油染事故において被害にあった水鳥等の救護に当たってきたことや、具体的な人材育成あるいは体制づくりに向けた研修会の実施や教本の作成等を行ってきたことなど、一連の実績についての説明がありました。同時に、油等汚染鳥の救護に携わることのできる専門獣医師の養成や、環境省や都道府県など、行政機関との協力体制強化を推進していくことの重要性が強調されました。

次に、WRV大阪支部の中津支部長より、最近の水鳥救護の事例として、昨年8月に北海道釧路市の沿岸で発生した、カモメ類のオレンジ色の物質による汚染被害からの救護活動の結果について報告がありました。その際、地元北海道で活動されている専門獣医師をはじめ各種スタッフの方々との連携も大変うまくいき、それぞれの持つ専門的技術が発揮されることにより、洗浄ならびにリハビリが極めて順調に進んだことが確認されました。

その後休憩をはさんで、昨年末に韓国で発生した原油タンカー「ハーベイ・スピリット」号事故に関わる対応活動についての報告が、馬場副会長および北海道から来られた斎藤聡獣医師よりなされました。まず馬場副会長からは、野村理事と共に現地に出向き、地元の獣医師や自然保護団体等の関係者との連携のもと、油汚染鳥の救護やその具体的技術の伝達に携わったことが説明されました。また、その後再び須田理事と共に韓国を訪れ、油汚染鳥救護に関する講義および実習を地元の獣医師や学生を対象に実施したことや、油汚染事故が発生した地元の県知事を始めとする代表団が日本にやって来た際に、環境省において意見交換を交えたことについても解説されました。一方、斎藤獣医師からは、現地において油の回収作業に実際に携わった時の様子や、現地の行政関係者との情報交換



馬場先生による資材の説明

と交流の状況等について報告がありました。

午後に入り、今度は馬場副会長の動物病院裏の駐車場において、油汚染鳥の洗浄法に関わる実技講習が行われました。そこではまず、馬場副会長より、一面に設置してある洗浄用の各種資器材について説明がありました。特に、救護現場において必要不可欠なお湯を素早く用意するための差し込み型の温水器が、

参加した関係者から注目を集めておりました。次に、皆川と愛知県から参加いただいた戸田昭博獣医師が代表となり、実際に重油の付着したアイガモ(家禽)の洗浄作業を披露いたしました。両名の協力により、国内外での油汚染鳥救護の経験やそれに関わる知見などをもとに、作業方法や注意点を逐一解説しながら、手際よく一連の洗浄作業を進めるようにしました。当初、全身が黒かったアイガモの姿も、洗浄後には元のきれいな姿に戻すことができました。今回は、洗浄法に



皆川理事と戸田先生による洗浄の様子

関わる新たなポイントも指摘され、参加者にとっても大変有意義な講習となった模様です。

プログラムの最後として、野生動物ボランティアセンターに戻り、須田理事の進行のもとに総合討論が行われました。その中で、油汚染救護に携わることのできる若い世代の専門家(獣医師)の育成の重要性や、先に WRV が実施したアンケート結果等も引用しながら、各都道府県において油等汚染鳥の救護体制の整備を進めていくことと、そのために予算措置を講じていくことの必要性が強調されました。また、具体的な救護作業に関しては、関係者が、被害に遭うような水鳥等の生態についてある程度熟知することの大切さや、被害鳥を収容した際に、身体一般検査や、血液検査(PCV、TP、GLU 値等)を実施し、その数値を参考にしながら、リハビリと放鳥に向けて個体を管理していくことの有効性が確認されました。さらに猛禽類等の餌として鳥肉を使用することは、マレック病を発病するリスクが考えられることから避けるべきとの見解も示されるなど、獣医学的見地からの新たな知見の交換もなされました。

「油汚染水鳥救護専門家会議」は、WRV が油汚染鳥救護の関わる諸活動を展開していくにあたって、中心的な役割を果たすリーダー(獣医師等)の集まりです。従って、今後ともわが国の油汚染対策、特に水鳥等の救護に関わる分野の体制づくりや技術の開発、あるいは普及活動に継続的に尽力してまいりますので、行政や各種団体をはじめ関係各位のご支援、ご協力を賜りたく、改めてよろしくお願い申し上げます。

=====

人災による傷病野生鳥獣の救護活動募金】のお願い

WRV では、傷病野生鳥獣救護活動を迅速に実行するため、人員の派遣費および資材の調達の募金活動を行っています。ご協力をお願いいたします。(救護活動用基金)

郵便局加入者番号：00190-5-72236

加入者名義：WRV 人災募金

南アフリカ共和国旅行記

大阪支部支部長 中津 賞

昨年 2 月、米国ニュージャージー州のカムデンに有る The adventure aquarium の専属獣医師 Dr. Don Stremme が主催する現地 8 泊のツアーに参加して来ました。

Don はフィラデルフィアの開業獣医師で、当地を旅行した際に病院を見学させてもらってからの付き合いです。その当時から水族館の嘱託獣医師をしていました。

彼は旅行好きで日本にも何回も来ています。Don からアフリカ旅行の e-mail をもらって、すぐに手続きを開始しました。日本からは私一人の参加です。当初はケープタウンのホテルで米国発の 10 名と合流する予定でしたが、アムステルダムで私が一泊して、次の日空港でケープタウン行きの出発を待っていたロビーで、初対面のヒトから you must be Sam. と声をかけられました。旅行会社からの封書には参加者全員のプロフィールが送られて来ていました。それで判ったのだと思います。典型的なアジア人の顔をしていますからね。全く予期していなかったのですがこうして偶然合流できました。航空会社のストと遭遇して直行便が飛ばず、アムス経由に変更したそうです。合流できたことでほっとしました。

最初に訪れたのはケープペンギンの保護地です。環境汚染で、今では生息数は 100 分の一以下に減少し、コロニーも小さく寂しい限りです。カモメがしきりに低空飛行してペンギンの巢内の卵狙っています。そして卵をくわえると空中 10m 位から砂浜に落として食べていました。食物連鎖の厳しさを目の当たりに見せられました。しかし、アザラシは岩礁地帯に数万頭が棲息し壮観でした。(写真 1)

カツオドリが次々とダイブして魚群に突撃する光景も印象的です。リハビリテーション施設のあると言う動物園も見学しました。しかし野鳥の救護施設ではなく飼鳥のリハビリで、主にヨウムの子引き症の治療に使われていました。毛引症は飼主との濃厚な接触を絶てば治る症例が多いですから、動物園に預けることは良い方法だと思いました。頭部の冠羽と嘴の外観から Hamerkop という鳥はとても印象的で忘れ難い地味な鳥でした(写真 2)。五大哺乳野生動物は紙幣にも取り入れられているようにバッファロー、サイ、カバ、ライオン、アフリカ象です。保護地域内の山頂に近いホテルは有刺鉄線で侵入を防いでいますが、草食性の反芻動物は角のねじれた Nyala という中型のシカの仲間は沢山敷地内に見られました。覚え方は NY(ニューヨーク)LA(ロサンゼルス)と言い換えると覚えやすいそうです。ホロホロチョウがヒナを連れて藪から藪へと駆け足で連れ歩いていました。保護地域内へはレンジャーがジープで案内してくれます。道路を曲がったところにバッファローが泥浴びをしていたり、すぐの草原にキリンが居たり、シマウマが居たりと驚かされることばかりです。ナイトツアー(写真 3)もあって、ハイエナの活躍が見えました。ライオンが倒したば



写真 1 ケープ沖の岩礁地帯に群れるアシカ



写真 2 Hamerkop



写真 3 フンコロガシ

かりのバッファローにむしゃぶりついている光景も鮮烈でした(写真 4、5、6)。ヨハネスバーグ以外は治安も良好で、早朝にはジョギングをしていました。

この次は来年の7月のガラパゴスツアーに参加したいと既に手付金を支払いました。2回目の来訪です。アカオネッタイチョウが赤く細い尾をゆらゆらと特に優雅な飛行を見せてくれます。グンカンドリ等の沢山の海鳥と再会できることが楽しみです。



写真 4 倒したばかりのバッファローに
むしゃぶりつくライオンの幼獣



写真 5 砂遊び中のサイの一家



写真 6 キリンとウシツツキ

講習会のご案内

第 29 回動物臨床医学年次大会

日時：2008 年 11 月 14 日(金)～16 日 (日)

場所：グランキューブ大阪（大阪国際会議場）〒530-0005 大阪市北区中之島 5-3-51

TEL 06-4803-5555

16 日 10:15～11:15 市民公開 野生動物フォーラム（WRV 共催）

「地球温暖化と生き物や私たちの暮らし」

講師：東京大学 樋口広芳先生
司会：WRV 新妻勲夫

15 日～16 日 時間未定 一般講演

「WRV カルテ集計のまとめ」ー1991 年～2007 年東京中心のカルテデータ分析ー

発表者：WRV 理事 須田 沖夫

「野生鳥獣保護の実情調査」ー都道府県の傷病野生鳥獣への取り組アンケート調査ー

発表者：WRV 理事 須田 沖夫

詳しくは <http://www.dourinken.com/taikai.htm> をご覧下さい。

平成 20 年度「油等汚染事故対策水鳥救護研修」実施案内

目的：油等汚染事故発生時に、野生鳥獣保護の観点から迅速かつ的確に対応できるよう、油等に汚染された水鳥の救護等に関する共通認識と技術を習得することを目的とする。

日程：第 1 回鳥獣保護行政担当者向け 平成 20 年 10 月 20 日（月）、21 日（火）
第 2 回現場救護リーダー向け 平成 20 年 12 月 4 日（木）、5 日（金）
第 3 回鳥獣保護行政担当者向け 平成 21 年 2 月 5 日（木）、6 日（金）

現地研修：平成 21 年 1 月 26 日（月）
＊ 現地研修では実習はありません。
＊ 開催地については選定中。

内容：以下のような事項に基づき、講義および実習形式で研修を行う。

- ① 油等汚染事故における行政の役割対応
- ② 油等汚染事故の基礎知識
- ③ 日本の油等流出事故時の情報体制
- ④ 水鳥の生態
- ⑤ 油汚染鳥の保護法・治療法
- ⑥ 油汚染鳥の洗浄法
- ⑦ その他

＊鳥獣保護行政担当者向けと現場救護リーダー向けで内容が若干異なります。

会場：環境省 水鳥救護研修センター研修室 〒191-0041 東京都日野市南平 2-35-2
TEL042-599-5050 FAX042-599-5051 HP <http://www.hinocatv.ne.jp/~oiled-wb/>

対象：国・地方自治体の鳥獣行政・防災行政担当職員、鳥獣保護センター等職員、獣医師、鳥獣保護員、動物園・水族館職員、水鳥救護に携わる関係者等

定員：1 回あたり 30 名（先着順）
＊申し込みは各開催日の 2 週間前まで。定員になり次第締め切り。

参加費：無料（参加のための交通費、宿泊費等は自己負担）

申込用紙：別紙

申込先：環境省 水鳥救護研修センター
〒191-0041 東京都日野市南平 2-35 TEL042-599-5050 FAX042-599-5051

研修運営：特定非営利活動法人 野生動物救護獣医師協会（WRV）

「野生動物看護学」文永堂出版の紹介

本著は「Practical Wildlife Care」(Les Stocker 著)の日本語版です。

2000年に英国で初出版された本で、野生動物の救護、診療、看護、リハビリ、そしてリリースに関する多くの人たちに愛読され、バイブル様に扱われている本です。そのため、多くの症例の情報がさらに集まり、新たな知識、技術そして経験が加わり、第2版が2004年に出版されました。それを日本獣医生命科学大学野生動物学教室の中垣和英先生が日本語に訳され、文永堂より今夏出版されました。

著者の Stocker 氏は 20 年以上にわたり、数多くの野生動物（哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類など）を保護・看護している方で、豊富な症例を獣医師の診断・治療を受け、科学的に看護しています。

野生動物は、総合的に伴侶動物（ペット）や家畜と体の構造は類似していますが、看護と治療はまったく異なった戦略が臨床獣医師に要求されます。

傷病野生動物リハビリテーションをうまく実施するには、専門化され且つ要求を満たすための十分な時間や設備を準備することが大変重要です。

野生動物の診療には、初歩的な臨床獣医学の知識と技術、基本的訓練が必要です。

動物や人の衛生管理、臨床上の無菌的な取り扱い、殺菌した機器やケージ、医療廃棄物や感染性廃棄物の管理、人の健康管理と安全規約の厳守、危険物管理等の周知と維持管理、動物のいるところでの喫煙や飲食の禁止などが傷病野生動物診療の基本です。これらのことが提供できなければ看護してみようとしてはいけません。日本の野生動物の診療に関与する人たちには特に必要な事項だと思います。

動物の種類別では、よく見られる種の博物学（生態など）、捕獲法および輸送法とそれに関する注意点として危険性が述べられています。

また、病気については外内の寄生虫とその駆虫薬の用量や使用法、外傷管理においては止血法、脚の管理、長骨の不正癒合した場合の応急手当について書かれています。そして保護した傷病野生動物の収容方法と給餌の種類・量と給餌法、リリースの場所の選択法、またこれに関連する法規（英国）などが具体的に述べられています。しかし、著者が獣医師ではないため、獣医学的診断法はありませんが、治療に関してはかなり具体的に書かれています。

本著は今、傷病野生動物救護活動を実施している全ての人とこれから傷病野生動物の救護活動をしてみたい獣医学生や動物看護学生、さらに行政の野生動物担当者や一般の人たちに読んでいただきたい本です。この本をよんでから自分の進むべき道を再検討することも重要かと思います。

人と、野生動物が今後とも良い関係を続けさせるために役立つ本であると思います。

2008 年 8 月 23 日

特定非営利活動法人 野生動物救護獣医師協会
獣医師 須田 沖夫

事務局より寄付のお礼

寄付ご協力者（敬称略）2008年6月1日～2008年8月31日

<一般>

<人災募金>

6.16 福生環境フェスティバル会場募金箱	301	7.30 みやけ動物病院(募金箱)	20,617
白倉豊	5,000		
6.30 姫動物病院(募金箱)	43,140		

事務局日誌 2008.6.26～2008.9.25

――7月――

10：高病原性鳥インフルエンザについて環境省へ意見書提出	対応：石橋、須田
19,20：日本小動物臨床学会年次大会ブース出展	対応：新妻、須田、箕輪、梶山
22：第7回 WRV 理事会	
28：日野自動車グリーンファンド助成金申請書提出	対応：須田
30,31：日本獣医生命科学大学水鳥救護実習	対応：大窪、新妻、野村、馬場、皆川、箕輪

――8月――

1：鳥インフルエンザについて文章、9月14日講習会案内	正会員へ発送	対応：須田
8：動臨研 アンケート調査集計原稿提出		対応：須田
12：動臨研 東京カルテ集計原稿提出		対応：須田
12：多摩動物園 吉原先生とカラスの血検など打ち合わせ		対応：須田
14：東大 樋口先生と打ち合わせ		対応：新妻、須田、箕輪
20：神戸アニマルケア国際会議 Knots と打ち合わせ		対応：新妻、馬場、須田、箕輪
20：第8回 WRV 理事会		
21：サンワークかながわ(川崎市)にて寄付金目録贈呈		対応：馬場、皆川
23,24：第2回 油汚染水鳥救護専門家会議		対応：馬場、皆川
28：浅草 カラスの捕獲・採血（東大 樋口先生と CIC）		対応：大窪、新妻、須田、箕輪
29：遠藤千尋さんセンター見学・面接		対応：須田、(新妻)
30,31：神奈川県野生動物リハビリテーター養成講座		対応：馬場、皆川

――9月――

5～8：野生動物医学会(神戸)		対応：中津
14：野生動物救護獣医師協会講習会		対応：野村、新妻
14：第9回 WRV 理事会		
23：香川県講師派遣(市民向け、獣医師向け 2題)		対応：須田
23：神奈川県動物フェスティバル		対応：馬場、皆川
26：ニュースレターNo.66 発行		

野生動物救護獣医師協会 (ホームページ) <http://www.wrvj.org/> (E-mail) kyugo@wrvj.org

NEWS LETTER No. 66 2008.9.26 発行

発行：特定非営利活動法人 野生動物救護獣医師協会

事務局：〒190-0013 東京都立川市富士見町 1-23-16 富士パークビル 302

TEL: 042-529-1279 FAX: 042-526-2556

発行人：新妻 勲夫 編集文責：須田 沖夫